

Fate/Persona Order

サクラモッチー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

FGOとペルソナ5のクロスオーバーものを書きたかったから書いた自己満小説。

※注意!!

原作改変しまくってます。

あとこれはFGOという名のクロス系オリジナルストーリー。

目次

炎上汚染都市 冬木

プロローグ | 1

切り札と猫と少女 | 7

再会とペルソナについて | 12

クリシユタリア・ヴォーダインム

19

英霊召喚 | 25

黒き騎士王 | 32

V S アルトリアの影 | 38

オルガマリー覚醒 | 45

ある魔術王の最後 | 53

召喚タイム

英霊召喚 アルトリア編 | 59

英霊召喚 キリシユタリア編 | 65

英霊召喚 立香編 | 71

英霊召喚 蓮編 | 78

邪竜百年戦争オルレアン

いざフランスへ!! | 85

A チームメンバー カドック・ゼムル

プス | 90

聖女の名は | 96

炎上汚染都市 冬木

プロローグ

かつて世界を救った英雄がいた。

その名は雨宮蓮。

心の怪盗団のリーダー、ジョーカーにしてベルソナ使いの少年だった。

これはそんな彼と藤丸立香、サーヴァントたちが紡ぐ物語である。

ここは人理継続保障機関フィニス・カルデア。

国連承認機関にして人類の未来を語る資料館。

地球環境モデル『カルデアス』を観測することによって未来の人類社会の存続を世界に保障する保障機関のようなものである。

雨宮蓮はカルデアが行った数合わせのための応募に当選したため、カルデアに来ていたのだ。

もちろん、相棒であるモルガナも（内緒で）連れてきている。

蓮「それにしても……………こんな場所があるとは……………」

モルガナ「まさに秘密基地って感じだぜ!!」

その時、どこからか厳しめな女性の声が聞こえた。

蓮「なんだ？」

モルガナ「あつたから聞こえてきたが……………何かあつたのか？」

蓮とモルガナはとりあえず声のした方へ向かうことにした。

オルガマリー「ちよつと!!もうすぐブリーディングが始まるっていうのに……………緊張感が足りないんじゃない!!」

スタツフ「す、すみません……………」

蓮「あの……………何してるんですか？」

オルガマリー「あなたは……………ああ、確か一般枠の……………」

蓮「雨宮蓮です」

モルガナ「我輩はモルガナ!!よろしくな!!」

オルガマリー「……………あなた、猫を連れてきたの？」

蓮「あ、はい、そうですけど……………」

オルガマリー「ふうん……………そう」

モルガナ「ん？」

モルガナを触りたいような目で見つめる少女。

その視線に蓮は気づいたのか

蓮「……………触ってみます?」

と言った。

オルガマリー「え!?!いいの?」

蓮「はい、モルガナもきつと喜びますよ」

オルガマリー「へえ……あなたモルガナっていう名前なのね……………」

そう言いながらモルガナを触る少女。

その顔は自然と緩んでいった。

レフ「所長、少しよろしいですか?」

オルガマリー「ええ、分かったわ」

少女はそう言うのと緑色の服を着た男性の元へ向かっていった。

モルガナ「むふふ、いい人だったな蓮」

蓮「そうだな」

しかしこの後ブリーディングがあること知り、急いでその会場に向かったがすでに入れなくなっていて落ち込む蓮なのだった。

ロマニ「やあ、初めまして、僕はロマニ・アーキマン。気軽にドクターロマンと呼んでくれ」

立香「私は藤丸立香!!ピチピチのJKです!!」

蓮「俺は雨宮蓮、こつちが猫のモルガナです」

モルガナ「よろしく!!」

フリーディングの会場に入れなかった蓮とモルガナは、同じく入れなかった少女、藤丸立香と出会い今現在ドクター・ロマンことロマニ・アーキマンのサボり場にいた。

立香「うわぁ……………黒猫ちゃんだ!!」

モルガナに目をキラキラさせる立香。

ロマニ「君、猫を連れてきていたのかい?」

蓮「ダメでしたか?」

ロマニ「いや、ダメじゃないよ。むしろみんな喜んでモルガナをモフると思う」

モルガナ「ニヤハツ!!我輩人気者になれるのか!!」

立香「でも猫なんて連れてきたらまたあの白い髪の女の子に怒られるよ」

蓮「白い髪の……………女の子?それってもしかして、オレンジ色の服を着て着て

いた人のことか?」

立香「え!?蓮くん知ってるの?」

蓮「ああ、さつきモルガナを優しそうな顔で撫でていたぞ」

ロマニ「あの所長が!？」

蓮の発言に驚くロマニ。

蓮「所長？」

ロマニ「ああ!!君が話した人物はこのトップの人だよ!!名前はオルガマリー・アニムスファイア。高飛車でヒステリックな最悪な上司だよ!!」

蓮「……………」ドクターロマニ、あなたオルガマリーさんに恨みでもあるんですか？」

ロマニ「いや恨みとかはないけど……………」

立香「でも何というか……………蓮くんからすごい歴戦の戦士?的なオーラを感じ

るんだよね」

モルガナ「蓮は我輩たち心の怪盗団のリーダーだからな!!」

立香「ねえ、どうしてそんな」

そう言いかけた時、突然大きな爆発音が聞こえた。

ロマニ「何だ!？」

蓮「爆発か!？」

ロマニ「とりあえず君たちは爆発したところに向かってくれ!!僕はスタッフの安全を

確認してくる!!」

蓮「分かった!!」

立香「私もマシユが心配だから行ってくる!!」

こうして二人は爆発のあつた場所へ向かつて行った。

それが人理を修復する大いなる戦いの始まりだと知らずに……………。

切り札と猫と少女

あれから爆発音のした場所に向かった蓮と立香。

しかしたどり着いたその場所は………
 例えるなら地獄のようになっていた。

蓮は立香の探しているマシユという人物を探していたが、マシユはすぐに見つかった。

マシユ自身は下半身の上に瓦礫が乗っていて身動きが取れなくなっており、蓮と立香は何とかマシユを助けようとしたものの何故か機械音声のようなものが聞こえたと思ったその瞬間、何故か蓮は辺り一面に広がる燃え盛る街に転移していた。

ジョーカー「………ここは？」

突然炎が延々と燃える街に転移してしまったことに驚きを隠せない蓮。

しかし、自らの姿に蓮はさらに驚くことになる。

それもそのはずで何故なら蓮は怪盗服に、怪盗ジョーカーの姿のなっていたのだ。

ジョーカー「ここは………パレス………なのか？」

モルガナ「おーい、ジョーカー!!」

声のした方を向くと、そこには同じく怪盗服姿のモルガナがいた。

ジョーカー「モルガナ!」

モルガナ「よかった……………無事だったのか、と言うか何でジョーカーの姿をし

ているんだ？」

ジョーカー「モルガナもな」

モルガナ「え……………ええ!? ホントだ!? 何で!」

ジョーカー「分からない、ここはパレスなのか？」

モルガナ「いや……………多分ここは現実世界だ」

ジョーカー「!」

モルガナ「多分……………我輩たちはタイムスリップのようなものでここに転移し

てきたんだと思う」

ジョーカー「転移……………」

そのことに蓮も思い当たることがあった。

転移する前に聞こえていた機械音声もレイシフトする、つまり転移するとハッキリ

言っていたのだ。

ジョーカー「そういえば立香とマシユは!」

ハツとしたようにそう言う蓮。

モルガナ「我輩たちがここにいるのなら立香たちもきつとここへ転移しているはずだ。早く探さないと!!」

ジョーカー「ああ!!」

立香たちを探すために蓮とモルガナがしばらく歩いていると、二人は骸骨たちに襲われているオルガマリーを発見した。

モルガナ「ジョーカー!!あそこにオルガマリー殿がいるぞ!!」

ジョーカー「助けるぞ!!」

モルガナ「ゾロ!!」

ジョーカー「アルセーヌ!!」

自身のペルソナを召喚し、オルガマリーを襲っていた骸骨たちを倒していく蓮とモルガナ。

ジョーカー「はあ!!」

モルガナ「やあ!!」

蓮やモルガナ自身も骸骨たちの方へ向かっていき、蓮はナイフで、モルガナはカトラスで骸骨たちを攻撃した。

ジョーカー「大丈夫か？」

オルガマリー「え、ええ……………何か」

モルガナ「オルガマリー殿が無事でよかった……………」

オルガマリー「ね、猫が喋った!!」

モルガナが喋ったことに驚くオルガマリー。

モルガナ「猫じゃねえよ!!」

オルガマリー「それよりあなたたちは……………」

ジョーカー「俺です、雨宮蓮です。でも今の姿はジョーカー。ただの切り札です」

モルガナ「そして我輩はモルガナだ!!」

オルガマリー「蓮……………モルガナ……………まさかあなたたち、さつきカルデア

の廊下で出会った……………!?」

ジョーカー「はい、そうです」

オルガマリー「ど、どうしたのよその格好は!!まるで……………怪盗みたいじゃない……………」

い……………」

蓮とモルガナの格好に呆然とするオルガマリー。

その目はまるで信じられないという目をしていた。

ジョーカー「そうですが？」

オルガマリー「そうですが……………あなたたち本当に怪盗なの!」

モルガナ「正確には悪いやつを盗む怪盗だけだな」

オルガマリー「ちよつと待って、何で怪盗がカルデアに応募してきているのよ!!」

ジョーカー「いや、面白そうなバイトがあったので」

オルガマリー「バイト目的なの!?!」

ジョーカー「はい」

オルガマリー「そう……………なのね、まあいいわ。それよりここはどこ? 私と一緒にいたマスターたちは?」

ジョーカー「……………分かりません」

オルガマリー「え……………?」

ジョーカー「……………他の人たちがどこに行ったのかは俺にも分かりません」

オルガマリー「そんな……………な」

オルガマリーは蓮の言葉にショックを受けていた。

ジョーカー「だけど、ひよつとしたらこの場所にいるかもしれません、だから一緒に探しましょう!!」

オルガマリー「……………分かったわ」

こうして、三人は生存者を探すことにしたのだった。

再会とペルソナについて

モルガナ、そしてオルガマリーと共に立香とマシユを探していた蓮は骸骨たちを倒しながら赤い炎に染まった街を歩いていた。

オルガマリー「あ、あそこ!!」

オルガマリーが指差す先にあったのは、同じく赤い炎の街を歩いていた立香と何故か大きな盾を持っていたマシユ、そして青い髪の子だった。

ジョーカー「立香!! マシユ!!」

立香「え!? 誰!？」

マシユ「もしかして……………蓮さん!？」

ジョーカー「ああ、そうだ」

立香「蓮……………って!? もしかして蓮くん!? その姿……………コスプレ?」
ジョーカー「違う。簡単に言えば俺の仕事着のようなものだ」

モルガナ「何せ俺たちは怪盗だからな」

「「ネコが喋った!」」

モルガナが喋ったことに驚く立香たち。

モルガナ「だからネコじゃねえよ!!」

オルガマリー「ちなみにその子はモルガナよ」

立香「嘘お!？」

クー・フリーン《術》「おいおい、コイツら本当にお前らの知り合いなのか?」

立香「た、多分」

ジョーカー「今の俺はジョーカー。そう呼んでくれ。それよりその男は?」

クー・フリーン《術》「俺の名はクー・フリーン、つっても今槍使いじゃなくてドルイドだけだな」

モルガナ「ドルイド……………なんかカッコいい!!」

オルガマリー「あなたたち!!談笑するのもいいけど前から骸骨が来ているわよ!!」

立香「え?」

前を見ると、骸骨たちがこつちへ向かっていた。

クー・フリーン《術》「何でまたあの骸骨たちが来てるんだよ!!」

ジョーカー「ここは俺たちに任せろ」

立香「で、でも」

モルガナ「我輩たちはこれでも強いんだぜ」

マシユ「わ、私も戦います!!」

ジョーカー「だが……………」

マシユ「私はデミ・サーヴァント。いつでも戦える準備は出来ています!!」

ジョーカー「……………分かった。じゃあ一緒に倒すぞ!!アルセーヌ!!」

モルガナ「ゾロ!!」

蓮とモルガナはペルソナを呼び出すと、骸骨たちの方へ向かっていった。

マシユ「マシユ・キリエライト、行きます!!」

蓮たちを追いかけけるように骸骨たちに向かっていくマシユ、一方の立香と青い髪の男は呆然としていた。

立香「何あれ!!召喚獣?」

クー・フリーリン《術》(召喚獣にしてはアイツらと魔力が似ているよう
な……………?まさか!?)

ジョーカー「エイハ!!」

モルガナ「ガル!!」

マシユ「はあああ!!」

骸骨たち《G a a a a !?》

ペルソナの技とマシユの盾が直撃し、倒されていく骸骨たち。

モルガナ「ジョーカー、マシユ、連携攻撃をするぞ!!」

ジョーカー「ああ!!」

マシユ「は、はい!!」

そう言うと、三人は骸骨目掛けて連続攻撃をくらわせ、骸骨たちを倒した。
マシユ「やった!!勝ちました!!」

モルガナ「俺たちの勝利だ!!」

ジョーカー「だな」

クー・フリーン《術》「……………ジョーカー、そしてモルガナ」

ジョーカー「ん?」

モルガナ「呼んだか?」

クー・フリーン《術》「お前らの召喚していた奴らはお前ら自身なのか?」

クー・フリーンの発言に驚くジョーカーとモルガナ。

「!?」

立香「キャスニキ、それどういうこと?」

クー・フリーン《術》「そのままの意味だよ、お前らが召喚したのはお前ら自身、つまりもう一人の自分呼び出しているのかって聞いたんだ」

立香「え!?それ本当なの!」

モルガナ「そうだ、俺たちはもう一人の自分……………ペルソナを召喚し、戦うこ

とができるんだ」

クー・フリーン《術》「やっぱりな」

オルガマリー「じゃ、じゃあ!!あなたたちが操っていたのが……もう一人の自分分ってこと!?!ありえないわ……」

ジョーカー「ああ、こんなことは本来ありえないことだからな」

マシユ「ありえない………?」

ジョーカー「俺たちのペルソナ能力は異世界でしか使用することができない。だから現実世界では使えないんだ」

立香「異世界………?」

モルガナ「簡単に言えば『心の世界』だ。『心の世界』に入ったらペルソナ能力を使えるようになるんだよ。ちなみにこの姿は『心の世界』に入ったら自動に変身するシステムなんだ」

立香「何それスゴイ!!」

マシユ「でも、どうして『心の世界』に入るんですか?」

ジョーカー「それは」

その時、通信機から突然通信がかかってきた。

???『あ、あー、マイクテスマイクテス………ダー!!元気があれば何でも

できる!!』

立香「……………何これ？」

マシユ「この声は……………まさか!？」

オルガマリー「キリシユタリア!?生きていたのね!!」

クー・フリーン《術》「でも何でアントニオ猪木なんだよ」

キリシユタリア『あ、聞こえてたのかい?すまない、一度こういうのやってみたくて……………』

モルガナ「オルガマリー殿の知り合いなのか？」

オルガマリー「知り合いも何も、キリシユタリアはカルデアによって選り抜かれたマスターの一人なのよ」

ジョーカー「つまり俺たちと同じ存在というわけか……………」

オルガマリー「キリシユタリア、それでどこにいるの？」

キリシユタリア『赤い大きな橋の近くだ、それよりAチームの他のメンバーは?』

オルガマリー「いえ……………他のメンバーはまだ見つからないわ」

キリシユタリア『そうか……………』

オルガマリー「とりあえず、私たちであなたを迎えにいくわ。それまでそこで待って』

キリシユタリア『分かった』

キリシユタリアがそう言うのと、通信が切れてしまった。

ジョーカー「それじゃあ、今の目的はキリシユタリアさんと合流する
と……………ですな」

オルガマリー「ええ、それが最優先事項よ」

立香「先輩を迎えに行くのってなんだか任務を遂行しているみたいで面白そう!!」

マシユ「はい、そうですね。先輩」

こうして今後の目的が発覚した蓮たちはキリシユタリアのいる場所まで行くことになつたのだった。

キリシユタリア・ヴオーダイム

立香「すごい!!車になったモルガナの乗り心地がめっちゃくちゃいい!!」

キリシユタリアと合流すべく、車に変身したモルガナに乗り込み移動する蓮たち。

マシユ「それにしてもモルガナさんはすごいですね。まさか車に変身できるなんて……………」

モルガナ「だろ?これが『認知』の力ってことだよ」

オルガマリー「『認知』の力ってすごいわね……………」

モルガナの能力に感心するオルガマリー。

ジョーカー「ただし、この姿に変身できるのも『心の世界』だけだけだな」

クー・フリーン《術》「また『心の世界』か」

立香「ねえねえ蓮くん、何で蓮くんたちは『心の世界』に入ってたの?」

ジョーカー「何って……………悪党たちの心の中にあるオタカラを盗んで改心させるため……………かな?」

立香「もしかして蓮くんって……………『心の怪盗団』だったの!」

ジョーカー「そうだけど」

立香「すごい!!」

マシユ「先輩、『心の怪盗団』とは一体……………?」

立香「知らないの!?!心の怪盗団は悪い奴らの心を盗んで改心させる怪盗たちなんだよ

!!」

マシユ「ええ!?!」

オルガマリー「というかあなた、そんなことをやってたの!?!」

ジョーカー「まあ、成り行きでああなったというか」

苦笑しながらそう言う蓮。

立香やマシユはそんな蓮とモルガナをキラキラとした目で見ていた。

立香「私……………そんなすごい人と一緒にいるんだ!!」

マシユ「まるで現代の英雄ですね!!」

クー・フリーン《術》「へえ、お前らそんなことをしてたのか」

大きな橋に到着し、モルガナ車から降りる蓮たち。

全員が降りると、モルガナは元の姿に戻った。

ジョーカー「さて……………確かここに……………」

マシユ「……………先輩」

立香「…………… うん、間違いなくあの人のだね」

立香とマシユの視線の先にいたのは、何故かパンイチになつてゐるキリシユタリアだつた。

モルガナ「…………… 何でパンイチなんだ？」

オルガマリー「私に聞かれても困るわよ!!」

クー・フリーン《術》「あいつ本当にお前の仲間なのか？俺にはただの変人しか見えな
いが……………」

オルガマリー「か、彼は一応名門魔術師一族の息子よ!!そんな彼がこんなこ
と……………」

モルガナ「一応、なんだな」

立香「あ、キリシユタリア先輩ヒゲダンスしてる」

オルガマリー「……………」

モルガナ「もしかして気づいていないのか？」

ジョーカー「かもしれないな」

立香「おーい!!キリシユタリア先輩」

立香の声に気づいたのか、蓮たちの元へ向かつて行くキリシユタリア。

キリシユタリア「やあ、君たちは私に会うのは初めてだよ。私はキリシユタリア・

ヴォーダイム、Aチームのリーダーをしている。よろしく頼む」

立香「私は藤丸立香!!ピチピチのJKです!!」

蓮「俺は雨宮蓮、そしてこっちがモルガナだ」

モルガナ「我輩はモルガナ!!ネコではないぞ!!」

キリシユタリア「喋るネコもどき……………うん、なんか面白い♪」

マシユ「キリシユタリアさんがモルガナさんのことを秒で受け入れました!!」

クー・フリーン《術》「いや早すぎんだろ!!」

そうわちやわちやしていた時、通信が入ってきた。

ロマニ『みんな!!無事なら反応してくれ!!』

オルガマリー「ロマニ!?よかった、あなたも無事だったのね……………」

ロマニ『所長!?どうして所長がそこに!?』

オルガマリー「私にもさっぱり分からないわ……………」

ロマニ『所長、他に生存者は?』

オルガマリー「私と立香、マシユ、蓮にモルガナ、それから……………パンイチの

キリシユタリアだけよ」

ロマニ『パンイチのキリシユタリア!?一体何があつたんですか所長!?』

オルガマリー「私に聞かれても困るわよ!!」

キリシユタリア「いや、気がついた時にはパンイチになってた。とうかこつちの方が楽」

オルガマリー「あなたはそのまま変質者になるつもりなの!？」

ジョーカー「むしろ何でこつちにパンイチで転移したんですか？」

オルガマリー「それよりも、レフは無事なの!？」

ロマニ『そのことなんですが……あの爆発の生存は20人にも達しません、

それに……レフ教授のいたところは爆心地に近くて生存確率が……』

オルガマリー「え……」

ロマニから聞かされた事実には耳を疑うオルガマリー。

オルガマリー「嘘よ……そんな……」

そのあまりの衝撃的にショックを受け、オルガマリーは思わずよろめいた。

マシユ「所長!! しっかりしてください!!」

オルガマリー「ははは……私は……どうしたらいいの……」

立香「所長……」

ジョーカー「……ひとまず今はオルガマリーさんの精神が落ち着くまで待

とう」

英霊召喚

ジョーカー「……………落ち着いたか？」

オルガマリー「……………ええ」

あの後オルガマリーは信頼していた人間を失ったからか号泣。

運はそのことを咎めることはせず、オルガマリーが落ち着くまで付き添っていた。

オルガマリー「私……………怖い……………もう誰も失いたくな

い……………」

ジョーカー「……………」

オルガマリー「……………私みたいな小心者にはみんなを守る力なんてない、私に

は……………」

ジョーカー「そうやって自分を否定し続けたら自分が自分でなくなりますよ」

オルガマリー「ジョーカー……………」

ジョーカー「オルガマリーさんにはオルガマリーさんなりのやり方でみんなを守れる

と俺は思います」

オルガマリー「……………ありがとう」

泣き腫らした目で蓮を見つめながらそう言うオルガマリー。

その時、オルガマリーの頭の中に謎の音が響くのと同時に激しい頭痛が襲った。
『あなたはいつまで人に甘えるつもりなの?』

オルガマリー「ヴッ!」

ジョーカー「オルガマリーさん?」

オルガマリー「……………何でもないわ」

オルガマリー「と言うわけで、戦力確保のために英霊を召喚するわよ!!」

ロマニ『いよっ!!待ってました』

ジョーカー「英霊……………召喚?」

オルガマリー「簡単に言えば英雄を召喚するってこと、まあ本来は別の用途で召喚するんだけどね」

立香「すごい!!じゃあ偉人とかを召喚できるってこと?」

目をキラキラさせながら興奮状態でそう言う立香。

オルガマリー「そうよ、そして英霊を召喚するのはジョーカー・立香・キリシユタリ

ア……………あなたたち三人よ」

ジョーカー「オルガマリーさんは召喚しないのか?」

オルガマリー「私はあなたたちのような選ばれしマスターじゃない、だから召喚しないわ」

マシユ「所長……………」

モルガナ「んでどうやって召喚するんだ？」

オルガマリー「ここには英霊に関する触媒がない……………だから聖晶石を

使うわよ」

そう言つてオルガマリーがポケットから取り出したのは、星のような形をした七色の石だった。

立香「綺麗……………」

モルガナ「あ!? これもしかして骸骨を倒したら何故か落ちてたやつか!？」

オルガマリー「ええ、ちゃんと回収させてもらったわ」

ロマニ『ちやつかりしてゐるなあ……………』

立香「はいはい!! 私トツプバツターやりたい!!」

マシユ「頑張ってください!!先輩!!」

クー・フリーン《術》「頑張れよ〜」

召喚陣の中心に聖晶石を置くと召喚陣が光り輝き、そして……………召喚陣の上には……………

アルトリア「問おう、汝がマスターか？」

青いドレスと銀色の鎧を纏った少女だった。

立香「うわぁ……………」

その少女の美しさに、凜々しさに思わず言葉が漏れる立香。

ロマニ『あれは…………… 間違いない!!アーサー王伝説に登場する騎士王、アー

サー王ことアルトリア・ペンドラゴンだ!!』

ジョーカー「あれが……………アーサー王」

立香「私藤丸立香!!よろしくね、アルトリアちゃん」

アルトリア「ええ、よろしくお願いします」

クー・フリーン《術》「初手がコイツって……………アンタ中々運がいいな」

アルトリア「久しぶりだな、ランサー……………ランサー?」

クー・フリーン《術》「悪りいな、今の俺はキャスターなんだよ」

アルトリア「そうなのか」

キリシユタリア「では次は私だね」

キリシユタリアが魔法陣に聖晶石を置くと再び召喚陣が輝きだし、そし

て……………

サマー・カルナ「サーヴァント、バーサーカー、夏の似合う男ことサマー・カルナだ。

よろしく頼む」

アロハシャツを着た白髪サングラスの男だった。

立香「さ、サマー・カルナ……………だど!?」

オルガマリー「……………ロマニ」

ロマニ『あ、うん、一応調べたんですけど……………モノホンのカルナでした』

オルガマリー「……………」

モルガナ「まさかとは思いますが……………パンイチだから来たんじゃないか

?」

クー・フリーン《術》「あく、それはあるかもな」

サマー・カルナ「俺はジリジリと体を照りつける太陽。そして夏の守護者だ。夏を冒

浼する奴は誰であろうと抹殺する」

ロマニ『なんか物騒なこと言ってるだけど!?』

キリシユタリア「サマー・カルナ、人類の夏を守るため……………人類の歴史を守

るために共に戦おう」

サマー・カルナ「ああ!!」

マシユ「ドクター!!あの二人、意気投合してます!!」

立香「あれぞ夏だよね……………」

ジョーカー「いやどこに夏要素が？」

そしていよいよ、蓮の番がやってきた。

モルガナ「次はジョーカーの番だな!!」

立香「頑張れ!!」

オルガマリー「……………ジョーカー」

ジョーカー「ん？」

オルガマリー「その……………頑張つて」

ジョーカー「……………そのつもりだ」

蓮が召喚陣に聖晶石を置くと、召喚陣が立香、キリシユタリアの時よりも激しく光り輝いた。

オルガマリー「こ、これは……………!?」

立香「もしかしてSSR!？」

光が消え、召喚陣の上に立っていたのは……………上半身にサメの刺青が彫

られた上半身裸の青い髪の男だった。

鮫男「よお……………アンタが俺のマスターか？」

ジョーカー「……………お前は？」

鮫男「俺か？俺はテメエら人間が生み出したイメージつつうやつが原因で歪んじゃまっ

ただの鮫だ。まあ……………気軽に鮫男でも呼んでくれ」

ジョーカー「鮫……………？」

ロマニ『蓮くん!!そのサーヴァントはいわゆる概念の集合体。人間が鮫に対して持っている概念がサーヴァント化したものだ!!』

立香「それって鮫⇨人を襲う恐怖の怪物的なイメージのこと？」

ロマニ『そう、だからそのサーヴァント極めてイレギュラーな存在なんだよ』

マシユ「つまり人間が鮫というもののイメージを勝手に作った結果、鮫男さんというサーヴァントが生まれた……………というわけですか？」

ロマニ『そういうことになるね』

オルガマリー「初っ端からそんなサーヴァントを呼び出すなんて……………」

モルガナ「ジョーカーは怪盗団の切り札兼トリックスターだからな!!」

オルガマリー「でも、これで戦力は確保できたわ。召喚したサーヴァントたちの力があればここを切り抜かれるかもしれないわ」

アルトリア「ええ、戦闘は私たちに任せてください」

サマー・カルナ「全ては夏を守るために!!」

鮫男「ああ……………俺たちに任せとけ……………」

黒き騎士王

英霊召喚の後、マシユはキャスニキことクー・フリーンに特訓をつけられ、宝具の使い方をなんとかマスターした。

そして……………今、蓮たちはとある洞窟に來ている。

理由は簡単、大聖杯を手に入れるためである。

しかしそう簡単に手に入れられるはずはなく、蓮たちの前にアーチャーが現れた。

アーチャー「……………來たか」

クー・フリーン《術》「アーチャー、お前が番犬になつてゐるなんてな。笑えるぜ」

アルトリア「あなた、どこかで……………？」

アーチャー「……………おい、何故騎士王がこんなところにいるんだ？」

アルトリア「私は立香のサーヴァント、一緒に來るのは当然だ」

アーチャー「……………なるほど、なら死ね」

アーチャーはそう言うと立香へ向かつて攻撃しようとしたが、サマー・カルナによってその攻撃は防がれてしまう。

立香「ナイスタイミング!!」

カルナ「Hay Hay!! 中々いい攻撃だな。どうだ？俺と同じサマーサーヴアントにならないか？」

アーチャー「はっ、サマーサーヴアントだと……………そんなものには興味はない」

カルナ「そうか……………ならば夏の業火に焼かれて死ね!!」

キリシユタリア「みんなは先に行つてくれ、ここは私とサマー・カルナがなんとかする」

鮫男「てな感じで俺ら頑張ってくるわ」

ジョーカー「分かった!!」

立香「キリシユタリア先輩、サマー・カルナ、鮫男、キヤスニキ、負けないでね!!」
そう言うと、蓮たちは洞窟の奥へ進んでいった。

洞窟の奥へ進み、大聖杯の前までやって来た蓮たち。

だが、蓮たちの前に現れたのは……………

ジョーカー「!?!」

立香「嘘……………」

モルガナ「おいおい、マジか!!」

黒い鎧に冷たい目のもう一人のアルトリアだった。

アルトリア「あれは………私？」

黒アルトリア「………まさかここで私と出会うとはな」

ロマニ『みんな気をつけろ!!あれはアルトリアの黒化した姿。つまりはアルトリアの負の側面が具現化したような存在だ!!だから骸骨たちとは比べ物にならないぐらい強いぞ!!』

立香「あれがアルトリアちゃんの負の側面………?」

ジョーカー「シャドウのようなもの………か」

黒アルトリア「まあいい、全員まとめて殺してやる」

オルガマリー「来るわよ!!」

オルガマリーがそう言った直後、黒アルトリアはアルトリアに一気に近づき攻撃する。

アルトリアは咄嗟に剣で防御したが、吹き飛ばされてしまった。

立香「アルトリアちゃん!!大丈夫?」

アルトリア「これぐらい何ともありません!!」

ジョーカー「アルセーヌ!!」

ペルソナを呼び出した蓮はアルセーヌで黒アルトリアに攻撃した。

黒アルトリア「ぐっ……………」

オルガマリー「攻撃が効いてる!! やっぱりサーヴァントもペルソナの攻撃を受けるのね!!」

立香「行けっ!! アルトリアちゃん!!」

アルトリア「はあああ!!」

黒アルトリアに攻撃するアルトリア。

お互い一步も譲らない激しい剣と剣のぶつかり合いに立香は目を奪われていた。

立香「すごい……………これがサーヴァントの戦いなんだ……………」

マシユ「やあ!!」

続けざまに攻撃を与えようとするマシユ。

しかし、黒アルトリアはそんなマシユを蹴り飛ばした。

マシユ「ぐはっ!?!」

黒アルトリア「ふん……………数で押し切ろうとしたか?」

アルトリア「貴様……………」

黒アルトリア「私はお前……………お前は私だ……………いくら否定しようとも私は存

在する……………」

アルトリア「黙れ!!」

そう言うと、黒アルトリアに強力な一撃を与えるアルトリア。

その直後、黒アルトリアに大きな先が生まれアルセーヌが黒アルトリアに攻撃した。

黒アルトリア「ぐあ……………!?!」

オルガマリー「その調子よ!!アルトリア!!ジョーカー!!」

黒アルトリア「ふふ……………いいぞ!!もつと私を否定しろ!!」

ジョーカー（何だ、この感じ……………まるであの黒いアルトリアをアルトリア自身

が否定することを喜んでいるような……………）

レンがそう思った時、黒アルトリアはある言葉を発した。

黒アルトリア「普通の女の子になりたい」

アルトリア「!?!」

黒アルトリア「それがお前の一番の願いだろうか？」

アルトリア「ち、ちが」

黒アルトリア「本当は国王なんかになりたくなかった。戦いたくなかった。みんなと普通の女の子としてワイワイしたかった……………」

アルトリア「……………やめろ」

黒アルトリア「でも、お前は王として生きるための不要なものとしてこの気持ちを切り捨て……………」

アルトリア「やめろ」

黒アルトリア「だが私には分かる!!お前が本当は英雄になりたくなかったことを!!」

アルトリア「やめろ!!お前に何が分かる.....」

黒アルトリア「さつきも言ったはずだ.....私はお前、お前は私なん

だ.....お前の考えることは全て分かる.....もう正直にな

れ.....そうすればお前は楽になる.....」

アルトリア「黙れ!!お前は.....お前は.....」

アルトリア「私なんかじゃない!!」

そうアルトリアが叫んだ瞬間、黒アルトリアを黒いモヤが包み、そして.....

巨大な怪物となった。

アルトリアの影「我は影.....真なる我.....これで私

は.....本物になれる.....」

VSアルトリアの影

モルガナ「おいおい……………何で現実世界にシャドウがいるんだよ!!」

オルガマリー「シャドウ?それがあの怪物の名前なの?」

モルガナ「ああ、シャドウは元々心の中にいる存在する闇、簡単に言えば自分自身が認めたくないもう一人の自分で、自分自身がシャドウを否定すればするほどシャドウは強くなるんだ!!」

ロマニ『何だつて!?!』

立香「じゃああの怪物を倒せばいいんだね!!」

モルガナ「シャドウを倒す唯一の方法はシャドウを受け入れること、そうすればシャドウを倒すことができる!!」

アルトリア「奴を……………受け入れる……………!?!」
ジョーカー「とにかく、アルトリアがシャドウを受け入れられるまで俺たちだけで戦うぞ!!」

マシユ「はい!!」

モルガナ「ゾロ!!」

ペルソナを召喚したモルガナはアルトリアの影に攻撃した。
アルトリアの影「ぐっ!!」

マシユ「はあああ!!」

続けざまにアルトリアの影を攻撃しようとするマシユ。

しかし、アルトリアの影はマシユを手で薙ぎ払った。

マシユ「きゃあ!?!」

アルトリアの影「どうして……………私は……………ただの女の子なのに……………」

立香「これって……………」

モルガナ「アルトリアの本音だ!!」

アルトリアの影「嫌だよ……………もう戦いたくない……………何で私は王様になるしかなかったの? 誰か……………誰か……………教えてえええ!!」

ジョーカー「来るぞ!!」

蓮たちに向けて大量の剣を飛ばすアルトリアの影。

ジョーカー（くそっ!! あんな大量の剣は躲しきれない!!）

マシユ「私に任せてください!!」

立香「やれる? マシユ」

マシユ「はい!! 宝具、展開します!!」

「疑似展開 ロード 人理の礎!!」

そう言うマシユの盾から結界のようなものが出され、剣を弾き返した。

ジョーカー「これがマシユの力……………」

モルガナ「さすがマシユ殿だ!!」

オルガマリー「これなら!!」

弾き返された剣は全部もれなくアルトリアの影に当たり、アルトリアの影は悲鳴を上げた。

アルトリアの影「いやあああああ!?!」

ジョーカー「今だ!! 総攻撃を仕掛けるぞ!!」

モルガナ「オルガマリー殿やマシユ殿、立香殿にいいところを見せなければ!!」

アルトリアの影に対し総攻撃を仕掛ける蓮とモルガナ。

その攻撃が急所に入ったのか、アルトリアの影は元の黒アルトリアの姿に戻った。

黒アルトリア「私……………恋もしたかった、おしやれもしたかった、

私……………私……………」

アルトリア「……………私は王です。しかし、その前に一人の女の子でした」

アルトリアの影に語りかけるように話すアルトリア。

立香「アルトリアちゃん……………」

アルトリア「王として戦いの最前線に出た時、私は女の子としての私を捨て、王として生きることを選んだ。例えそれが本心だったとしても……………」

黒アルトリア「……………」

アルトリア「今まで見て見ぬふりをしてごめんさい。私は私、あなたはあなた、これからはずっと一緒です」

黒アルトリア「うん…… ありがとう……… どう」

涙を流しながら黒アルトリアはそう言うと、光の粒子となつてアルトリアを包んだ。

すると青いドレス姿から一変、青と金のエクスカリバーカラーのハイレグ型のボディースーツに変わっているのと同時に上空にはエクスカリバーカラーの女性型ペルソナがいた。

アルトリア「これは……………」

モルガナ「すごい!!アルトリア殿がペルソナに目覚めた!!」

立香「アルトリアちゃんカッコいい」

アルトリア「これが…………… 私…………… ?…………… づつ」

突然頭を押さえながら倒れかけるアルトリア。

立香「アルトリアちゃん!？」

ジョーカー「ペルソナに目覚めた直後は体力を大幅に消耗するんだ。だからあまり無理をしない方がいい」

アルトリア「分かった……………」

ロマニ『ちよつ、ちよつと待って!?この反応は……………!?』

オルガマリー「ロマニ、どうかしたの?」

ロマニ「立香ちゃん、蓮くん、落ち着いて聞いてくれ、今その場にいるアルトリアが……………人間になっているんだ!!」

蓮たち《え?ええ!?!》

衝撃の事実に驚きの声を上げる蓮たち。

オルガマリー「どうしたこと!?なんでサーヴァントが人間になっているのよ!!」

モルガナ「……………まさか!?!」

マシユ「モルガナさん、もしかして何か知ってるんですか?」

モルガナ「あくまでこれは俺の仮説だが……………ペルソナが覚醒するって

ことは新しい自分になる。つまり、アルトリアは人間として転生したんだと思う」

立香「て、転生!?!」

ジョーカー「確かに……………そうと云いようがない」

アルトリア「私が……………人間に……………?」

立香「人間に転生したってことは……………アルトリアちゃんと友達になれるってことだよね!!」

アルトリア「… ええ、そうですね」

アルトリアは微笑みながらそう言った。

マシユ「こんなことが起きるなんて……………」

ジョーカー「となると……………」

モルガナ「コードネームを付けないとな」

アルトリア「コードネーム?」

モルガナ「ペルソナに覚醒したやつはとりあえずコードネームをつけるっていうのが

俺たち『心の怪盗団』のルールなのさ!!」

立香「はいはい!! 私いい名前思いついちゃった!! アルトリアちゃんって騎士王だか

ら…………… 『ナイト』とかはどう?」

アルトリア「ナイト……………」

ジョーカー「いい名前なんじゃないか?」

モルガナ「我輩もそう思う!!」

マシユ「私も賛成です」

オルガマリー「私もよ」

ジョーカー「じゃあ『ナイト』って名前でいいか？」
アルトリア「ああ、構わない」
こうして、新たなペルソナ使いが増えたのだった。

オルガマリー覚醒

クー・フリーン《術》「おーい、お前ら〜」

立香「あ!!キヤスニキ!!みんな!!」

ジョーカー「無事だったのか!!」

鮫男「こっちは終わってたぜえ」

サマー・カルナ「骨のない敵だったな」

キリシユタリア「あれ?アルトリアの姿が違うような……………」

立香「ふふふ……………実はアルトリアちゃんはペルソナに目覚めたの!!」

キリシユタリア「ペルソナ?」

クー・フリーン《術》「もう一人の自分だとよ」

キリシユタリア「もう一人の……………自分?」

オルガマリー「それともう一つ、アルトリアが人間に転生したわ」

「!?!?」

アルトリアが人間になったという事実には驚くキリシユタリアたち。

鮫男「それもペルソナに関係しているのか?」

オルガマリー「ええ、恐らくはね」

アルトリア「今の私はナイト、ただのペルソナ使いだ」

立香「でもマシユとカツコよかったよ!!」

マシユ「えへへ……………」

???「ペルソナ……………とても興味深い能力だ」

ジョーカー「誰だ!!」

声の方へ向くと、そこには驚きの人物がいた。

オルガマリー「レ……………フ?」

マシユ「レフ教授!?生きていたんですね!!」

レフ「ふん、まさか残留思念となつて特異点にレイシフトするとは……………」

オルガマリー「残留……………思念?」

レフ「気付いていないのか?お前はもうすでに死んでいる。いや、私が殺したといふべきかな?」

オルガマリー「え……………?」

立香「そんな……………」

レフ「それにこれを見たまえ」

そう言つてレフが出したのは……………
赤く染まったカルデアスだった。

オルガマリー「嘘……………カルデアスが……………」

レフ「そりやあそうだろう!!何せ人類の歴史は焼却されたのだからな」

ジョーカー「焼却……………?」

オルガマリー「……………人類の歴史が消え去ったってことよ」

モルガナ「なんだと!?!」

オルガマリー「どうして……………どうしてこんなことをしたの!!」

レフ「どうしてだって……………そんなの決まっているだろう?私が悪魔、いや、

魔神柱フラウロスだからだよ」

オルガマリー「悪魔……………ですって!?!」

ロマニ『しかもフラウロスはソロモンが封印した72の悪魔の一人だぞ!!なんでそんな奴がカルデアに!?!』

レフ「そんなことを私が教えるとても?」

ロマニ『ぐっ……………』

レフ「私の正体に気づかず信用するとは……………全くもって愚かなで馬鹿な女だよ」

オルガマリー「嘘……………嘘よ……………」

レフ「お前のような阿呆は死んで当然だからな」

笑いながらそう言うレフ。

その言葉に蓮はピクリと反応した。

ジョーカー「死んで当然な人間がいるはずがないだろ」

レフ「……………何だと？」

ジョーカー「彼女は死んで当然な人間じゃない!!生きる資格を持った人間だ!!」

立香「そうだよ!!所長は厳しいけど優しい人なんだよ!!」

マシユ「それに私の宝具に名前をつけてくれました!!あんなにいい人はいません!!」

オルガマリー「蓮、藤丸立香、マシユ……………」

キリシユタリア「ね、彼女は死ぬべき人間じゃないだろう？」

レフ「貴様ら……………」

オルガマリー「……………何だか私、腹が立ってきたわ。レフのこともそう

だけど、レフの本性に気づかなかった私自身にもイライラしてきた!!レフ・ライノール、

いえ、フラウロス!!あなただけは私が絶対に倒してやるんだから!!」

『その言葉、待っていたわ』

オルガマリー「づっ……………!?!」

突如謎の音が頭に響くのと同時に激しい頭痛に襲われるオルガマリー。

『あなたは本当に愚か。人に甘えてばかりでその人間の本性に気づかない大馬鹿者』

オルガマリー「うう……………あ……………あ……………」
マシユ「所長!」

ジョーカー「これは……………まさかペルソナに目覚めかけてるのか?!」

立香「え?! どういうこと?!」

モルガナ「自分を受け入れことはペルソナの覚醒方法のうちの一つ、ペルソナに覚醒する方法なんていくらでもある!! オルガマリー殿の場合、自分自身の中にある『叛逆の心』が目覚めかけているんだ!!」

『そんな自分とはもう離別しなさい、なぜならあなたは……………今日から反逆者となるのだから』

オルガマリー「いいわ……………やってやろうじゃない!!」

そういうのと同時にオルガマリーの顔にオレンジ色の仮面が現れた。

レフ「!」

『我は汝、汝は我……………空に輝く星のように美しく輝きましょう!!』

オルガマリー「力を貸して……………ハヤブサ!!」

流血と共に仮面を剥がすオルガマリー。

そしてオルガマリーは青白い炎に包まれ、オレンジと黒のライダースーツの怪盗服姿に変わっていて、空中には太陽光パネルの羽に右腕がビーム砲のようなものを持ったオ

レンジのボディカラーの機械的な姿のペルソナがいた。

レフ「くそっ!?!どうなっているんだ!?!」

オルガマリー「フラウロス!!これが奇跡の力ってことよ!!」

そう言うのとオルガマリーのペルソナ、ハヤブサはレフ目掛けてビーム砲を発射した。
レフ「ギヤアアア!?!」

ビーム砲が直撃したレフ…………… フラウロスは断末魔をあげながら死亡した。

立香「やった!!レフを倒した!!」

クー・フリーン《術》「へえ、あの嬢ちゃんやるじゃねえか」

アルトリア「すごい威力ですね……………」

マシユ「所長、カッコいいです!!」

鮫男「これがペルソナ……………」

サマー・カルナ「なかなかHOTな力だな」

ロマニ『こ、これは……………!?!』

キリシュタリア「ロマニ、どうかしたのか?」

ロマニ『所長!!あなた人間に戻ってますよ!!しかもレイシフト適正ありというおまけ付き!!』

オルガマリー「え……………?」

ジョーカー「そうか!!ペルソナに覚醒したアルトリアはサーヴァントは英霊、そしてオルガマリイさんは残留思念!!つまり!!」

ロマニ『アルトリアの時と同じく人間に転生したってことか!!』

オルガマリイ「じゃ、じゃあ……………私……………」

そう言いかけた時、オルガマリイは倒れかけた。

マシユ「所長!!」

モルガナ「オルガマリイ殿はペルソナに目覚めたばかり、だから体力を消費したのかもしれない」

クー・フリーン《術》「スカツとしたぜ、嬢ちゃん」

オルガマリイ「……………ジョーカー」

ジョーカー「ん？」

オルガマリイ「あなたのおかげで私は強くなれた……………ありがとう」

ジョーカー「いいんですよ、それに俺は事実を言っただけです」

オルガマリイ「……………あなたらしいわね」

???「全く……………あんな小娘にやられるとは……………」

蓮たち《!?!》

突然、フラウロスに立っていた場所に褐色白髪の男が現れた。

その瞬間、その男から強力な威圧的なオーラが放たれた。

ロマニ『そんな……まさか!?!』

??? 「久しいな、ロマニ・アーキマン。いや……魔術王ソロモンよ」

立香「何……あの人……」

キリシユタリア「と言うか今ドクターのことをソロモンと言わなかったか!?!」

鮫男「……お前は?」

??? 「我が名はゲ・テ・イ・ア!! 人類悪にしてソロモン72柱の魔神たちの集合体なり!!」

ある魔術王の最後

オルガマリー「人類悪ですって!？」

目の前にいる男、ゲーティアの発言に驚くオルガマリー。

ジョーカー「オルガマリーさん、知っているんですか？」

オルガマリー「……………人間の獣性によって生み出された7つの大災害

であり、人類と人類の文明を滅ぼす破滅の化身。それが人類悪よ」

モルガナ「つまり俺たちの敵ってことだな」

オルガマリー「ただ人類悪に対抗できるのは各クラスの頂点に立つサーヴァント、
冠位^{グラント}クラスのサーヴァントしかないの」

立香「じゃああいつを倒せないってこと!？」

オルガマリー「……………ええ」

ゲーティア「もう一人の自分、ペルソナ……………か、中々面白いものを見せてもらった。だが……………貴様らはここで終わりだ」

蓮たちにゲーティアが攻撃を仕掛けようとしたその時

ロマニ「そうはさせない!!」

突然カルデアにいたはずのロマニ・アーキマンが現れたのだ。

立香「ドクター!？」

マシユ「どうしてここに!？」

ゲーティア「やはり来たか、ソロモンよ」

キリシユタリア「ゲーティア、君に聞きたいことがある」

ゲーティア「何だ？」

キリシユタリア「お前はロマニのことを魔術王ソロモンと言った。ゲーティア、君はロマニの正体を知っているのか？」

そうキリシユタリアが訪ねた時、ゲーティアは衝撃の言葉を発した。

ゲーティア「ああ、知っていると、何せロマニ・アーキマンの正体は……………我らを生み出したグランドキャスターの一人、ソロモンなのだからな」

キリシユタリア「何だと!？」

オルガマリー「嘘……………」

ジョーカー「オルガマリーさん、魔術王ソロモンとは一体誰なんですか？」

オルガマリー「……………魔術の始まりとも言える人物であり、彼の死に

よって神秘そのものが衰退していったのよ」

立香「え!?じゃあすごい人じゃん!!」

マシユ「でも、どうして……………」

ゲーティア「コイツはな、人間として生きたいがために自らサーヴァントであることをやめた愚かな英霊なのだよ」

サマー・カルナ「なるほど、実にc o o rな男だ」

鯨男「人間として生きたいがためにサーヴァントをやめた男……………お前、面白い奴だなあ」

アルトリア「それもまた彼の決めた運命、それをなぜ愚かと呼ぶのですか?」

ゲーティア「ふん……………どうとでもいえ、だが……………まさかお前自身
が来るとはな」

ロマニ「ゲーティア……………僕が生み出した存在にして人理焼却の真犯人
よ……………こうなったのは全て僕の責任だ。だから僕自身でけりをつけ
る……………」

そう言うと、一歩一歩ゲーティアに近づくとロマニ。

オルガマリー「ロマニ?あなた何を言って……………」

ロマニ「所長、キリシユタリア、マシユ……………そして藤丸ちゃんに蓮。カルデアのこと……………頼んだよ」

その瞬間、ロマニは走り出し……………ゲーティアに抱きついた。

そしてロマニが抱きつくのと同時にゲーティアとロマニは空中に浮き……………赤く染まったカルデアスの方へ引き寄せられていた。

キリシユタリア「くそっ!!そういうことか!!」

立香「キリシユタリア先輩、何か分かったんですか!!」

キリシユタリア「ロマニは……………ゲーティアもろともカルデアスに突っ込むつもりだ!!」

蓮たち《!?!》

ロマニの行動の真意に信じられないという顔をする蓮たち。

オルガマリー「嘘でしょ……………」

マシユ「ドクター!!戻ってきてください!!」

クー・フリーン《術》「チツ、あの野郎……………自分を犠牲にするつもりで……………」

立香「なんで……………なんでドクターが死ななきゃならないの!!」

口々にそう叫ぶオルガマリーたち。

そんな声が聞こえたのか、ロマニは蓮たちの方へ向くと……………ニコリと笑った。

ロマニ「これは僕自身の落とし前、だから君たちを巻き込むわけにはいかないんだ」
マシユ「でも!!」

ロマニ「マシユ、君なら大丈夫。僕がいなくても君ならきつとサーヴァントとして頑張っている。だって……………君には仲間がいるんだから」

ゲーティア「くそつ!! 離せ!!」

ロマニ「所長……………今までありがとうございました」

オルガマリー「ロマニ……………あなたはいい医者だったわ!! 絶対に忘れな
いから!!」

ロマニ「藤丸ちゃん、蓮くん、マシユや所長のこと……………頼んだよ」

立香「分かった!! マシユのこと、絶対に守ってみせるから!!」

泣きながらそう言う立香。

ジョーカー「ああ、任せておけ」

ゲーティア「おい……………やめろ……………やめろおおお!!!」

ロマニ「みんな……………僕を一人の人間として接してくれて……………」

ありがとう」

そう笑顔で言った後、ロマニ・アーキマンとゲーティアはカルデアスの中に飲み込まれたのだった。

オルガマリー「うっ……………うっ……………ロマニ……………」
アルトリア「ロマニ・アーキマン、あなたは本当に勇気ある英雄で
た……………」

鮫男「……………死なば諸共精神で逝くんじゃねえよ」

立香「……………みんな!!ドクターは私たちにカルデアのことを任された。

だからドクターの分まで頑張ろう!!」

ジョーカー「……………そうだな」

モルガナ「そのために我輩たちはいるんだからな!!」

サマー・カルナ「ああ!!」

キリシユタリア「ロマニのためにも頑張らないとロマニに怒られてしまいかもしれな
いしね」

こうして、蓮たちはロマニへの想いを胸に人理修復の戦いに身を投じるのだった。

召喚タイム

英霊召喚 アルトリア編

炎で染まっていた特異点、冬木から帰還した蓮たち。

アルトリアが人間に転生したこと、オルガマリーがペルソナに覚醒したこと、そして………。ロマニがゲーティアを道連れにしたこと。

これらはカルデアの職員たちに改めて戦う覚悟を決める出来事となった。

立香「アルトリアちゃん」

アルトリア「はくい」

立香に呼ばれ、やって来たのは蓮と立香と同じ制服を着たアルトリアだった。

蓮「可愛いな」

マッシュ「ですね」

モルガナ「アルトリア殿、とっても似合ってるぞ」

アルトリア「………ありがとう」

モルガナに褒められて嬉しそうにするアルトリア。

立香「それで所長、今から何をするの？」

オルガマリー「何って……… 戦力確保のためにサーヴァントを召喚するに決

まってるでしょ？」

立香「てことは……… 新しい仲間が増えるってこと!!」

オルガマリー「そういうこと、ちなみにマスター適正のあるアルトリアにもサーヴァントを召喚してもらうよ」

アルトリア「私も……… ですか？」

キリシユタリア「いいんじゃないか？ マスターが増えれば戦力が増えるってことだし」

鮫男「俺も賛成」

サマー・カルナ「俺も異議はないぞ」

オルガマリー「というわけで、まず誰から召喚する？」

アルトリア「私から行きます」

立香「アルトリアちゃん頑張れ!!」

召喚陣に聖晶石を置くと、召喚陣は光り輝いた。

スタツフー「霊基。パターン……… エクストラクラスです!!」

マシユ「いきなりエクストラクラスですか!？」

立香「いつけえ!!アルトリアちゃん!!」

光が収まるとそこにいたのは……………緑色の髪の毛に黒い服を着た少女だった。

ヴォイニツチ「ヤッホー!!私の名前はヴォイニツチ手稿、クラスはフォーリナー!!世界で最も有名な奇書だよ!!私のことはニツチって呼んでね!!」

オルガマリー「ヴォイニツチ手稿ですって!？」

蓮「オルガマリーさん、知っているんですか？」

オルガマリー「知ってるも何も、ヴォイニツチ手稿は世界でもっと有名な奇書!!その内容は地球上に存在しない言語や植物などが描かれていて未だに多くの謎を残している本なのよ!!」

立香「そんなにすごいサーヴァントだったの!？」

ヴォイニツチ「ふふん!!そうでしょそうでしょ?」

アルトリア「ニツチ……………人理を守るために力を貸してほしい」

ヴォイニツチ「うん、いいよ。だって私は人間によつて生み出された存在、人によつて生み出されたのなら人を守るのが私の役目だもん!!」

キリシユタリア「それでどうする?もう一回召喚するかい?」

アルトリア「ええ、戦力はなるべく多めの方がいいですしね」

再び召喚陣に聖晶石を置くと召喚陣はまた光り輝き、そして………紫の
鎧を見に纏った騎士が現れた。

ランスロット《剣》「サーヴァント、セイバー、ランスロット。参上致し………
え？」

アルトリア「ランスロット………!?」
マシユ「あれが円卓の騎士、ランスロット………」

立香「男前だ〜」

蓮「でも、確かランスロットってアルトリアを………」

ランスロット《剣》「王………なのでですか？」

アルトリア「………そうだ、私の名前はアルトリア・ペンドラゴン。かつて円
卓の騎士を束ねた騎士王、だが今の私は英霊ではない、今の私はペルソナ使いであり、
サーヴァントたちを使役するマスターであり………そして人間だ」

ランスロット《剣》「王よ、私は………私は………」

アルトリア「確かにあなたは私を裏切った。でも………たとえ裏切った
としてもあなたは私の騎士団の1人、だからもう自分を責めないでほしい」

ランスロット《剣》「王………」

人目も憚らず、男泣きをするランスロット。

それは、長い間彼が抱えていた重荷から解放された瞬間だった。

鮫男「アンタがランスロットかあ……………男前でマジでムカつく」

ランスロット《剣》「……………君は？」

鮫男「俺？俺は鮫男、人間が勝手に作り出したイメージが具現化した存在だよ」

サマー・カルナ「そして俺は夏の守護者サマー・カルナだ」

鮫男「何勝手に会話に乱入したんだこの夏狂いが!!」

サマー・カルナ「それは夏に対する侮辱か？」

鮫男「ああそうだ!!」

サマー・カルナ「そうか……………ならば真夏の太陽の火に焼かれて死ね!!」

モルガナ「おい!!なんでそこで喧嘩を始めるんだよ!!」

蓮「鮫男、とりあえず落ち着け」

一連の会話の流れにポカーンとするランスロット。

アルトリア「すまない、あんな感じだが頼りになる仲間なんだ」

ランスロット《剣》「頼りになる仲間……………ですか」

立香「もちろん!!ランスロットも頼りになる仲間だよ!!」

マシユ「はい!!」

ランスロット《剣》「私が……………頼りになる仲間……………」

その言葉に顔が明るくなるランスロット。

ランスロット《剣》「このランスロット!! カルデアの一員として頑張らせていただきませう!!」

英霊召喚 キリシユタリア編

アルトリアの番が終わり、次はキリシユタリアの番が来た。

立香「今度はどんなサーヴァントなのかな？」

蓮「また変なサーヴァントが来なければいいが……………」

サマー・カルナ「俺は変ではないぞ、少しHOTでcoolなだけだ」

ランスロット《剣》「HOT…………… cool?」

アルトリア「気にするなランスロット、あれが彼の平常運転なのだ」

鮫男「夏の暑さで頭がイカれたんじゃねえか？」

サマー・カルナ「いや、俺はイカれてなどいない。夏の暑さに身を任せた結果、サマー

サーヴァントとして生まれ変わっただけだ」

鮫男「やっぱイカれてんじゃねえか」

キリシユタリアが召喚陣に聖晶石を置くと、召喚陣は光り輝いた。

スタツファー「霊基クラスは…………… ランサーです!!」

オルガマリー「ランサー!! っことは槍使いね」

光が収まると、そこにいたのは白とパステルカラーを基調したうさぎをモチーフにし

た服と日傘を持った着た幼い少女だった。

モードレッド・イースター・リリイ「えつと……………初めまして、イースターを守りし守護者、モードレッド・イースター・リリイです。よ、よろしく願いします!!」

ペコリと頭を下げるモードレッド・イースター・リリイ。

アルトリア「は……………はあ!?!」

衝撃的なサーヴァントが召喚されたことに思わず叫んでしまったアルトリア。

一方ランスロットは……………

ランスロット《剣》「……………アレもアレでアリだな」

と、納得していた。

モードレッド・イースター・リリイ「お、お久しぶりです。父上……………」

アルトリア「はうっ!?!」

オルガマリー「アルトリアが（精神的に）ダイレクトアタックされた!?!」

ランスロット《剣》「なるほど、乙女になったモードレッド……………うん、いけ

るな」

モルガナ「いや何が!?!」

蓮「やっぱりこうなったか……………」

キリシユタリア「これからよろしく頼むよ、モードレッド・イースター・リリイ」

モードレッド・イースター・リリイ「はい♪モードレッド・イースター・リリイ、頑張ります!!」

立香「それじゃあどんどんいってみよう!!」

キリシユタリア「おー!!」

再び聖晶石を召喚陣に置き、サーヴァントの召喚を始めるキリシユタリア。

そして次に召喚陣に現れたのは……………

ギルガメツシュ・サンタ「フハハハ!! 我はギルガメツシュ・サンタ!! さあ!! 我のプレゼントを受け取るがよい!!」

金髪のサンタクローズだった。

立香「今度はサンタだ!!」

蓮「何故にサンタ!?!」

モルガナ「なあオルガマリー殿、ひよつとしてキリシユタリアは変なサーヴァントを呼び寄せる体質なんじゃ……………」

オルガマリー「…………… かもしれないわね」

ギルガメツシュ・サンタ「お前が我のマスターか?」

キリシユタリア「ああ、そうだ」

ギルガメツシュ・サンタ「大体の事情は分かった。人理のため、そしてクリスマスの

ために貴様に力を貸してやろう!!」

マシユ「あ、クリスマス前提なんですネ」

立香「まあサンタだしね」

キリシュタリア「キリシュタリア、ラスト一回行きま〜す!!」

蓮「……………」立香、キリシュタリアさんにガンダムを見せたのか?」

立香「うん、そうだよ」

キリシュタリアは聖晶石を以下略。

そして召喚陣に現れたのは……………」

ジョン・ゲイシー「ふふふ……………」まさか僕がサーヴァントとして召喚さ

れるなんてね……………」

ピエロ姿の男だった。

キリシュタリア「君は?」

ジョン・ゲイシー「僕?僕はジョン・ゲイシー、クラスはキラ^{殺人鬼}。キラークラウ

ン……………」と云えば分かるよね?」

立香「ジョン・ゲイシー!?!」

オルガマリー「どうしてあのシリアルキラ^{殺人鬼}がサーヴァントになってるのよ!!」

ジョン・ゲイシー「それは僕自身も聞きたいよ、出来ることなら地獄の業火で焼かれ

たかったけど……………可愛い男の子たちがいるとならば話は違うけどね」

蓮とサマー・カルナ、キリシユタリアを見つめながらそう言うジョン・ゲイシー。

蓮「今悪寒がしたような気が……………」

サマー・カルナ「……………どうやらお前には真夏の太陽の火でバーベキューされるのがお似合いらしい」

ジョン・ゲイシー「ハハハ!!僕もバーベキューは好きだよ。でも……………」

どちらかと言えば僕はフライドチキン派なんだ」

ランスロット《剣》「フライドチキン?それは美味しいのか?」

立香「衣がサクサクしてて中はジューシーな鶏肉料理だよ!!」

アルトリア「じゅるり……………」

蓮「じゃあ今度作ろうか?」

アルトリア「いいのか!」

蓮「一応自炊はできる方だからな」

キリシユタリア「とにかく……………ジョン・ゲイシー、共に人理修復を手

伝つてくれるかい?」

ジョン・ゲイシー「ああ、僕を処刑した人間があつさり消滅するなんて僕は許さない。

だから君に力を貸そう」

オルガマリー「……………」
る体質があるのかしら？」

やっぱり彼にはああいうサーヴァントを呼び寄せ

英霊召喚 立香編

立香「さて!!次は私のターンだよ!!」

モルガナ「よっ!!待ってましたっ!!」

マシユ「先輩、頑張ってくださいね!!」

聖晶石を召喚陣に置くと、召喚陣は光り輝き、そして……………

ゴジラ「……………俺の名はゴジラ、クラスはバーサーカー。テメエらが生み出した化け物、怪獣だ。お前らに手を貸すのは癪だが……………まあいい、今回だけはテメエらに力を貸してやる」

褐色黒髪に黒い尻尾が生えたワイルドな女性が現れた。

立香「か、怪獣王だっ!!」

キリシユタリア「怪獣王?」

蓮「ゴジラは映画ゴジラに登場する怪獣で、怪獣という概念を作った存在だ」

マシユ「じゃあゴジラさんがいなければ怪獣ものは生まれなかったってことですか!?!」

アルトリア「あれが……………怪獣王」

モルガナ「それにゴジラは放射線に浴びたことがきっかけで変異し、誕生した生物だからバーサーカーなのも頷けるな」

鮫男「ふくん、お前も人間によって生み出された存在なのか……………」

ゴジラ「お前は？」

鮫男「俺か？俺は鮫男、人間の勝手なイメージで生み出された無辜の怪物だよ」

ゴジラ「……………」俺と似ているな」

鮫男「ああ、そうだな」

同じく人間によって生み出された存在だからか意気投合する鮫男とゴジラ。

立香「何か意気投合してるね」

蓮「多分二人が人間たちによって生み出された存在同士だから意気投合しているからじゃないか？」

ランスロット《剣》「なるほど」

サマー・カルナ「ほう……………」その尻尾、真夏の日差しに焼けた肌のように美し

い……………」

ゴジラ「……………」それは誉めているのか？それとも俺に対する侮辱か？侮

辱ならば即座に楽にしてやろう」

サマー・カルナ「いや、俺はただ誉めているだけだが？」

ゴジラ「それなら普通に褒める!!何で夏に例えているんだよ!!」

鮫男「だとき、夏狂い」

サマー・カルナ「やるのか?春雨」

鮫男「誰が春雨だゴルア!!」

ゴジラ「誰が黒ゴーヤだゴルア!!」

オルガマリー「いやあなたのことは言つてないから!!」

アルトリア「またカルデアが騒がしくなりますね」

マシユ「はい、そうですね」

立香「それじゃあ、次やっちゃうよ」

再び聖晶石を置き、召喚を始める立香。

そして次に現れたのは……………

アキレウス・オルタ「ひゃい!?ここどこ!?あ、ど、どうも……………フォーリナー、

アキレウス・オルタです」

魔術師のような服に身を包んだ男だった。

立香「うわっ!?!強そうな人が来たなあ」

オルガマリー「アキレウス・オルタ?そんなサーヴァント、聞いたことがないわ」

アキレウス・オルタ「そ、そうだよ、だって俺は……………クティラーの

息子なのだから」

蓮「クティーラだど!?」

モルガナ「クティーラって、クトウルフの娘の!？」

立香「ていうかクトウルフ神話系サーヴァントキター!!」

アキレウス・オルタ「え……………お、俺のお母様のことを知っていますか?」

立香「知ってるも何も……………クティーラっていつクトウルフが死んでも

いいように次の肉体を妊娠してるっていう邪神でしょ?」

立香がそう言った瞬間、アキレウス・オルタはずいっと立香に近づいた。

アキレウス・オルタ「ああ、まさかお母様とお爺さまを知っている人がいるなん

て……………もしかして、マスターはお母様とお爺さまの信者なのですか!？」

立香「え、あ、ちが」

アキレウス・オルタ「嬉しいなあ……………まさか身内の信者がいるなん

て……………あ、そうだ!!一緒に旧支配者のキャロルを歌いましょう!!」

蓮「……………なるほど、アキレウス・オルタはこういうやつだったのか」

オルガマリー「あく、自分は自虐するけど家族のことになると変なスイッチが入る系

のサーヴァントね」

モルガナ「中々厄介なサーヴァントがきたな……………」

鮫男「うわあ……………お前並に面倒くさい奴が来たじゃねえか」

サマー・カルナ「面倒くさい？夏が似合う男の間違いだろう？」

鮫男「(精神的に)痛いな」

マシユ「(精神的に)痛いですね」

ゴジラ「やっぱコイツ殴ってもいいか？」

オルガマリー「ダメに決まってるでしょ!!」

立香「よし!!次がラストだ!!」

三度目となる召喚で出てきたのは……………

切嗣「アーチャー、衛宮切嗣だ。よろしく頼む」

アルトリアのかつてのマスターだった。

アルトリア「は？」

切嗣「アル……………トリア？」

アルトリア「切嗣……………なのか？」

切嗣「アルトリア……………君がどうしてここに!?!」

アルトリア「……………まあ、色々あって今の私は一人の人間としてここに

います」

切嗣「一人の……………人間……………?まさか!?!」

アルトリア「……………はい、今の私はただの人間。故に英霊ではありませ
ん」

切嗣「英霊が人間に転生するなんて聞いたことが……………」

立香「ねえねえアルトリアちゃん、この人アルトリアちゃんの知り合い？」

アルトリア「……………ええ、かつての知り合いです」

モルガナ「でも、衛宮切嗣なんて人物は俺らは知らないぞ？」

蓮「ああ」

切嗣「君たちは……………？」

立香「私の名前は藤丸立香!!ここに居るのは切嗣さんの仲間だよ!!」

切嗣「僕の……………仲間？」

立香「うん!!」

アルトリア「切嗣、ここの人たちは皆信頼できる人ばかりだ。だから安心して背中を
預けてほしい」

切嗣「……………分かった。魔術師殺しと言われた僕の力が役に立つのなら

力を貸そう」

立香「ありがとう!!切嗣さん!!」

切嗣「ところで……………さつきから土下座をしている人がいるんだが……………」

アルトリアの知り合いかい？」

アルトリア「ランスロットです」

切嗣「え？」

英霊召喚 蓮編

蓮「最後は俺……………か」

モルガナ「ま、主役は最後になるって言うからな!!」

鮫男「頑張れよく、マスター」

オルガマリー「蓮はあの時も鮫男みたいな強いサーヴァントを召喚できたから大丈夫よ!!」

切嗣「彼が鮫男のマスターなのか」

サマー・カルナ「そうだ、俺的にはあの春雨男をバーベキューしてやりたいんだが……………」

鮫男「ああん?なんだったらテメエのその日焼けした肌に漂白剤でもぶっかけてやるうか?」

サマー・カルナ「ふん、やれるものならやってみる」

切嗣「二人とも、喧嘩やめ……………」

「黙れ見た目アサシン野郎」

切嗣「ひどい!!」

召喚陣の上に聖晶石を置く蓮。

すると召喚陣は輝きだし……………白いワカメヘアの少年が現れた。

マール「ビーストの可能性を秘めた僕を呼び出すなんて君はチャレンジャーだなあ。でも……………そういうとこ、嫌いじゃないよ」

蓮「……………お前は？」

マール「僕？僕はマール。煩惱の化身、釈迦を墮落させるのに失敗したただの悪魔だよ」

オルガマリー「嘘!?何でマールが!」

モルガナ「あく、なるほど。そゆことか」

マシユ「モルガナさん、何か知っているんですか？」

モルガナ「えっと……………その、蓮は女にモテやすいって言うか……………女難の体質があるというか……………」

オルガマリー「女難!」

モルガナ「一年前ぐらいにバレンタインがあったんだけど、その時は確か10人ぐらの女が来て修羅場になったんだよな」

マシユ「え!?そんなことがあったんですか!」

蓮「そういえばあったな、そんなこと」

立香「蓮くんってモテモテなんだね」

オルガマリィ「……………」

オルガマリィ（……………） どうしてかしら、さっきのバレンタインの話を知ったら

急に嫉妬の感情が出て来てしまったわ…………… まさか、ね）

マーラ「ふうん…………… そういうことなんだ♪」

オルガマリィを見つめながらそう言うマーラ。

オルガマリィ「な、何よ!!何で私を見ながらニヤニヤするのよ!!」

マーラ「ふふふ…………… 何でもない♪」

蓮「力を貸してくれ、マーラ」

マーラ「もちろん、僕は人間が大好きだからね♪」

立香「じゃあもう一回召喚する?」

蓮「もちろん、そのつもりだ」

再び聖晶石を置く蓮。

そして次に現れたのは…………… 白髪の良い女性だった。

第九「ルーラー、交響曲第九番『歓喜の歌』と申します。どうぞよろしく願います」

立香「今度はクラシック音楽だ!!」

キリシユタリア「想像の斜め上をいったな」

モルガナ「いやアンタが言うな」

ランスロット《剣》「綺麗だ……………」

アルトリア「ランスロット？」

ランスロット《剣》「ア、ハイ、スミマセンデシタ」

マシユ「交響曲第九番…………… 確か、ベートーベンの作曲したクラシック音

楽ですよね？」

第九「はい、私はベートーベン様によって作られた曲。故に私はサーヴァントではないのですが…………… 人理を修復するために私も戦います!!」

アルトリア「立香、交響曲第九番とはどのような曲のですか？」

立香「あ、ちよつと待って……………」

そう言うと、立香はスマホから交響曲第九番の曲を流した。

アルトリア「これは……………」

立香「この曲はね、よく年末で歌われているんだ」

アルトリア「確かに一年の締めくくりにはいい曲ですね」

第九「えへ……………」

アルトリアに褒められ、嬉しそうにしている第九。

蓮「さて……………次が最後か」

最後の召喚を始める蓮。

最後に現れたのは……………紫色の髪に死んだような目をした男だった。

テン「我はモーゼが放ちし十の災い、故にクラスはディザスター、我のことはテンと呼べ」

オルガマリー「モーゼの十の災いですって!？」

モルガナ「オルガマリー殿!!このサーヴァントについて知っているのか!？」

オルガマリー「……………かつてモーゼは古代エジプトで奴隷のような扱いをされていたイスラエル人を助けるためにエジプト全体に呪いをかけた。その呪いこそ彼……………十の災いなのよ」

蓮「十の……………災い……………」

モーゼがエジプトに放った十の災い。

どの災いも強力で恐ろしく、今もなお強力な呪いとして彼は語り継がれている。

そんな存在が召喚されたからか、カルデア内は緊張感で包まれていた。

しかし、何故か蓮はテンを見つめながら微笑んだ。

テン「何故我を見ながら微笑む」

蓮「いや……………テンのような強いサーヴァントが来てくれるとは思って

なくて」

テン「……………我が怖くないのか？」

蓮「別に怖くはない、それにカルデアに召喚されたのなら俺たちは仲間だろ？」

蓮の返答にキョトンとした後、テンは微笑み

テン「……………お前は変わったやつだな」

と言った。

立香「ひよつとして蓮くんって強いサーヴァントを呼び出す体質なのかな？」

マシユ「かもしれませぬね」

鮫男「じゃあ歓迎。パーティーも兼ねて飲もうぜ」

マーラ「いいね!! 僕お酒が大好きなんだ」

第九「お酒? それは美味しいのですか？」

テン「我は酒は苦手だ。故にミルクを頼む」

立香「お酒飲みそうな顔なのには？」

アルトリア「ランスロット、切嗣、一杯付き合ってくれるか？」

ランスロット《剣》「ええ、もちろん!!」

切嗣「君の気が済むまで僕は付き合うよ」

キリシユタリア「ふふふ、一気に騒がしくなったね」

オルガマリー「でも、なんだか嬉しいわ。だつて……… 私たちは一人じゃ
ないもの」

そう言うと、微笑むオルガマリー。

蓮「そうだな」

立香「さくて!!食べまくるぞ!!」

邪竜百年戦争オルレアン

いざフランスへ!!

英霊召喚が終わった次の日、蓮たちはいよいよ第一特異点へ行くことになった。

蓮「え!?オルガマリーさんも特異点に!？」

オルガマリー「ええ、私もあなたたちと一緒に戦うわ」

マシユ「所長と一緒にいてくれるなんて……………心強いです!!」

立香「でもカルデアのことはどうするの？」

キリシユタリア「カルデアのことは私に任せてくれ。これでも私は指揮するのは得意な方なんでね」

マシユ「キリシユタリアさん……………」

キリシユタリア「今回行く特異点の場所はオルレアン、つまりはフランスだ」

モルガナ「フランス!!」

キリシユタリア「フランスはフランスだが時期的には1431年、おそらくジャンヌ・ダルクが処刑されてしばらく経った頃だろう」

蓮「ジャンヌ・ダルク……………」

ジャンヌ・ダルク。

誰もが知る英雄であり、フランスで活躍した戦乙女にして祖国に裏切られ処刑された悲劇の少女。

似たような体験をした蓮にとつては、親近感が湧く英雄であった。

立香「そつか、ジャンヌ・ダルクには会えないのか……………」

アルトリア「……………彼女もまた、己の心を犠牲にした英雄だったのだな」

キリシユタリア「それで今回連れて行くサーヴァントなんだが……………ジャンケ

ンでグーを出したサーヴァントを連れて行こうと思う」

オルガマリー「何でジャンケン？」

キリシユタリア「その方が公平だろう？」

モルガナ「確かにそうだな」

サーヴァントたちがジャンケンをした結果、アルトリア側からはランスロット、キリシユタリア側からはジョン・ゲイシー、立香側からはゴジラ、そして蓮からは第九が行くことになった。

ジョーカー「ここが……………フランス……………」

無事に1431年のフランスへレイシフトした蓮たち。

ちなみにアルトリアやオルガマリーはペルソナ使いとして覚醒したからか、怪盗服に変身していた。

キリシユタリア『あー、あー、聞こえるかな?』

モルガナ「バツチリ聞こえるぞ!!」

キリシユタリア『よかった、無事にレイシフト出来たみたいだね』

ファルコン（オルガマリー）「風が気持ちいいわ……………それに空気もい

い……………」

ランスロット《剣「王よ、お怪我はありませんか?」

ナイト（アルトリア）「ああ、大丈夫だ」

第九「私、こういう風に外の空気を吸うのは初めてなんです!!」

ゴジラ「ふん、この時代の人間は科学という概念を知らない……………だから

まだこの空気が汚れきっていないのだ」

ジョン・ゲイシー「ふふふ、楽しみですね……………」

ジョーカー「モルガナ」

モルガナ「ああ!!任せとけ!!モルガナ、変身!!」

そう叫ぶと、モルガナはバスに変身した。

立香「今度はバスだ!!」

モルガナ「ニヤハハ!!これが『認知』の力だ!!」

アルトリア「バスに変身するとは……………モルガナはすごいな」

ランスロット《剣》「認知……………つまり誰かが猫は車に変身するものだと思えば

こんな風に変身できるのか？」

モルガナ「そゆこと」

切嗣『マスター、何か困ったことがあったらいつでも僕たちを呼んでくれ』

鯨男『俺たちはそのためのサーヴァントなんだからな』

立香「うん!!分かった!!」

こうして蓮たちはモルガナバスに乗り込み、移動するのだった。

ジョーカー「そういえば、さつき空を見た時に輪のようなものがあつたがあれは？」

キリシユタリア『おそらく、何かしらの魔術だろうね』

ジョーカー「魔術……………」

ファルコン《剣》（オルガマリー）「特異点を解消すればあの光の輪は消える……………ということかしら？」

キリシユタリア『かもしれない、いずれにしろここから我々の人理修復が始まるんだ、気を引き締めて行つてくれ』

ジョーカー「分かった」

立香「ねえねえ、UNOやろうよ」

ファルコン（オルガマリー）「……………あなたさっきの話聞いてたの？」

呆れたようにそう言うファルコン。

立香「そんなにピリピリしててもダメだよ、気分転換にUNOで盛り上がろう!!」

ジョーカー「……………確かに立香のいうことにも一理あるな」

ナイト（アルトリア）「UNOとは何ですか？食べられるのですか？」

モルガナ「いや食べ物じゃねえよ!!」

マシユ「わ、私もUNOやります!!」

ランスロット《劍》「私も参加してもいいかな？」

ジョン・ゲイシー「くくく……………これもまた旅の楽しみですねえ……………」

ゴジラ「第九、お前もやるか？」

第九「もちろん!!私、カードゲームもやってみたかったです!!」

ファルコン（オルガマリー）「ま、こういうのもたまにはいいわよね？」

Aチームメンバー カドック・ゼムルプス

ジョーカー「モルガナ、街までどのくらいだ？」

モルガナ「あともう少しだけ」

立香「ねえねえ、この時代のフランスの街つてどんな感じなんだろう？ やっぱリフアンタジーな世界みたいな感じなのかな？」

ファルコン（オルガマリー）「かもしれないわね」

モルガナ「む、あれは……………」

ジョーカー「モルガナ、どうかしたのか？」

モルガナ「人だ!!人がワイバーンに襲われてる!!」

ジョーカー「何だと!？」

ファルコン（オルガマリー）「ワイバーンですって!?!少なくともワイバーンはこの時代に居ないはずなのに……………」

立香「とにかく助けよう!!」

モルガナ「よっしゃ!!スピード上げてくぞ!!」

カドック・ゼムルプスは混乱していた。

人理を守るためにレイシフトしたはずなのに目覚めた場所は森の中、しかもそこはワイバーンの巣だったこともあつてか、カドックは大群を成したワイバーンから追われていた。

頼みの綱のサーヴァントは召喚できず、ただひたすらにカドックは逃げていた。

カドック「くそっ……………このままじゃ……………」

このままでは死ぬ。

そうカドックが思った次の瞬間、ワイバーンの群れの中心を赤いビーム砲が貫いた。

カドック「……………え？」

ファルコン（オルガマリー）「やった!!ヒットしたわ!!」

モルガナ「やるじゃないかファルコン!!」

ジョーカー「大丈夫ですか!!」

カドック「君……………たちは？」

立香「先輩と同じマスターです!!」

カドック「!?!」

ジョーカー「と言っても、俺とモルガナ、ナイトとファルコンはペルソナ使いだけだな」

カドック「ペルソナ？」

ナイト（アルトリア）「とにかく!!今はワイバーンを倒すことに集中しましょう!!」
 ファルコン（オルガマリー）「空にいるワイバーンは私たちに任せて!!マシユたちは地上に降りてきたワイバーンをお願い!!」

マシユ「はい!!」

ランスロット《剣》「初陣の相手がワイバーンとは、中々手応えがありそうだ」
 ゴジラ「へっ!!ドラゴンか……………面白れえ!!」

第九「音楽系サーヴァントとして頑張ります!!」

ジョン・ゲイシー「腕がなりますねえ……………」

ジョーカー「行くぞ!!」

「「ペルソナ!!」」

ペルソナを呼び出し、空中にいるワイバーンたちを蹴散らしていく蓮たち。

一方のマシユたちは地上に降りたワイバーンたちと戦っていた。

マシユ「はあ!!」

ワイバーン「G a a a a !!」

その時、ワイバーンが放った咆哮にゴジラがピクリと反応した。

ゴジラ「……………」
 あ?『雑魚は引つ込んでろ?』だと……………」

ど

うやらテメエらには再教育が必要なようだな……………マスター!!

立香「……………分かった!!ゴジラ、派手にやっちゃって!!」

ゴジラ「おう!!」

「テメエらに教えてやるよ……………本当の蹂躪ってやつをな!!」

「始まりの怪獣王!!」
キング・オブ・モンスター

その叫んだ瞬間、ゴジラは元の姿……………怪獣王としての姿に戻った。

ナイト（アルトリア）「あれが……………怪獣王」

ファルコン（オルガマリー）「彼女が立っているだけでもとんでもないオーラを感じる……………これが本来の彼女の姿なのね」

全員がゴジラの姿に圧倒されている中、ゴジラは一步一步歩いていき……………そして放射熱戦をワイバーンたちに受けて放った。

放射熱戦をもろに浴びたワイバーンは断末魔を上げながら死んでいき、あつという間にワイバーンを倒してしまった。

立香「お疲れ様、ゴジラ」

立香がそう言うのと同時に少女の姿に戻るゴジラ。

ゴジラ「けっ、俺に喧嘩を売った割には弱っちい連中だったな」

ナイト（アルトリア）「……………ゴジラ、あなたがなぜ怪獣王と呼ばれるのか、その理

由が今分かりました。さすがは王の名を持つ怪獣なだけがありますね」

ファルコン（オルガマリー）「すごいわゴジラ!! あんな宝具を使えるなんて私知らなかった!!」

ゴジラ「ほ、褒めたところで……………嬉しくなんてねえからな……………」

立香「あ、照れてる」

ゴジラ「照れてねえよ!!」

その時、蓮たちの元に通信が入ってきた。

キリシユタリア『もしも? さつき戦闘音が聞こえたんだけど大丈夫かい?』

カドック「キリシユタリア!? 無事だったのか!？」

キリシユタリア『その声は……………カドック!? 生きていたのか!!』

カドック「よかった……………他のメンバーは?」

キリシユタリア『……………分からない、カドックこそどうしてフランスに?』

カドック「僕にもサツパリ分からないんだ。気がついたらワイバーンの巣がある森に

いて……………」

立香「でもカドック先輩がいるのなら百人力だよ!!」

カドック「それよりあの怪物は一体……………」

モルガナ「あれはペルソナ、もう一人の自分を覚醒させることで目覚める力だ」
カドツク「もう一人の………自分？」

ジョーカー「とりあえず他のワイバーンが来る前にモルガナバスに乗り込もう」

この後、モルガナバスとなったモルガナに驚きすぎて泡を吹いて気絶したカドツクなのだった。

聖女の名は

カドック「そうか、そんなことが……………」

モルガナバスで移動しながら冬木の出来事を聞き、悲しそうな顔をするカドック。

カドック「だけど、ここで悲しんでばかりではロマニに顔向けできないな」

立香「じゃあ!!」

カドック「ああ!!命をかけて僕たちを守ってくれたロマニのためにも共に人理を修復しよう!!」

ファルコン（オルガマリー）「カドック……………」

モルガナ「みんな!!そろそろ着くぞ〜」

ジョーカー「これは……………!?!」

蓮たちの目の前に広がっていたのは、廃墟となった街らしき場所だった。

ファルコン（オルガマリー）「酷い……………」

ジョーカー「とにかく、生存者を探そう」

モルガナ「ん?この匂いは……………?」

ジョーカー「モルガナ、何か分かったのか？」

モルガナ「あつちからいい匂いがする!!」

マシユ「ということは……………」

立香「生存者がいる!!」

ジョーカー「モルガナ、その場所まで案内できるか？」

モルガナ「ああ!!」

モルガナに案内され、匂いのする場所に向かう蓮たち。

そして、そこにいたのは……………」

ジャンヌ「!？」

人々に炊き出しをしていた少女だった。

ジョーカー「あなたたちは……………」

住民「ま、待ってくれ!!この人は確かに竜の魔女に瓜二つだが俺たちを助けてくれ

たんだ!!だから……………」

立香「竜の魔女？」

マシユ「あ、あの!!私たちはこの人に危害を加えるとかはしませんよ」

住民「え?そうなのか？」

ジョーカー「俺たちは空の上にある光の輪を調べに来ただけだ。それより、あの街の

惨状は一体……………」

ジョーカーがそう尋ねると、街の人はポツリとこう言った。

住民2「…………… 竜の魔女だ」

立香「竜の…………… 魔女？」

住民2「ああ!!俺たちを助けてくれた人に瓜二つなんだが、髪は白くて服が黒くて…………… まるで魔女みたいだったんだ」

ジョーカー「…………… その人とこの人の関係は？」

住民1「分からない。だが、この人…………… ジャンヌ・ダルクは俺たちを救ってくれた紛れもない英雄なんだ。例え他の連中が竜の魔女だと言おうが、俺たちにとって
は恩人なんだよ」

少女のことを感謝するように言う街の住人。

しかし、街の住人の言葉にオルガマリーは驚いていた。

ファルコン（オルガマリー）「ちよつと待って!?あなたジャンヌ・ダルクなの!」

ジャンヌ「はい。我が名は聖処女ジャンヌ・ダルク、新人サーヴァントとしてこの時代に召喚されました」

キリシユタリア『なるほど…………… 彼女は処刑されて間もない英雄、だから新人サーヴァントと名乗るのも納得がいく』

サマー・カルナ『HEY!! HEY!! そのマーメイド、共に真夏の太陽の光で肌を焼かないか?』

鮫男『テメエは黙ってる夏狂い!!』

テン『なあマスター、コイツに災いを与えてもよいか?』

端末越しから聞こえる鮫男とテンの今すぐ殺りそうな声に蓮は苦笑した。

ジョーカー「ダメだ」

ゴジラ「くそっ!!今すぐ殺りてえ!!」

ジャンヌ「えっと………この声の主たちはあなた方の知り合いなのですか?」

ジョーカー「ああ、そうだ。ちなみに俺の名前は雨宮蓮、だが今の俺のことはジョーカーと呼んでくれ」

モルガナ「我輩はモルガナだ!!」

立香「藤丸立香だよ」

マシユ「マシユ・キリエライトです!!」

ファルコン（オルガマリー）「オルガマリー・アニメスファイア、コードネームはファル

コンよ、よろしくね」

ナイト（アルトリア）「アルトリア・ペンドラゴン、コードネームはナイトだ」

ランスロット「ナイトのサーヴァント、ランスロット。一応クラスはセイバーだ」
ゴジラ「立香のサーヴァント、ゴジラだ。そこら辺にいるワイバーン共と一緒にするんじゃねえぞ」

第九「交響曲第九番、『歓喜の歌』です。クラスはルーラー、よろしく願いますね!!」

ジョン・ゲイシー「僕はジョン・ゲイシー、ただのピエロさ」

カドツク「僕はカドツク・ゼムルプス、多分この中では弱い方だと思う」

キリシユタリア『私はキリシユタリア・ヴォーダイム、蓮くんたちは君の味方だと思えばいい』

ジャンヌ「私の……………味方?」

立香「そうだよ!!だからドーンと胸を貸してね!!」

立香の発言に対し、ジャンヌは微笑みこう言った。

ジャンヌ「ふふっ……………ありがとうございます」

ジョーカー「それより、食料は足りるんですか?」

住民1「それが……………もうすぐ底をつきそうなんだ」

住民2「食料を持ってこようとした奴らは全員ワイバーンの餌食になってしまっ

て……………」

ゴジラ「そのワイバーンの肉ならあるが？」

ジャンヌ「本当ですか!？」

カドツク「……………ワイバーンって食べれるのか?」

キリシユタリア『とある魔術師が残した資料によれば脂が乗ってて美味しいらしい』
 ランスロット「幸いにも大量のワイバーンの肉がありますし、これなら一ヶ月は持つ
 でしょう」

住民Ⅰ「い、いいのか？」

モルガナ「何言ってるんだ、困った時は助け合い……………だろ?」

住民Ⅰ「ありがとう……………本当にありがとう……………」

涙を流しながら蓮たちに頭を下げる街の住人。

キリシユタリア『もう一人のジャンヌ……………まさか!?!』

ファルコン（オルガマリー）「キリシユタリア、あなた何か分かったの?」

キリシユタリア『……………おそらく、そのジャンヌは聖杯によつて生み出さ

れた架空の存在だ』

ジョーカー「聖杯だと!？」

ファルコン（オルガマリー）「聖杯……………なるほど、そういうことだった

のね!!」

マシユ「所長、何か分かったのですか？」

ファルコン（オルガマリ）「聖杯はどんな願いも叶える願望器、だから……」

立香「誰かが聖杯を使って偽物のジャンヌちゃんを生み出したってこと!？」

カドツク「だが、いったい誰が……」

ジョーカー「……これで今の目的が決まったな」

ナイト（アルトリア）「ええ、そうですね」

ジョーカー「偽物のジャンヌと……そのジャンヌを生み出した元凶を倒す!!」

ジャンヌ「ならば私も手伝います!!」

モルガナ「ジャンヌ殿!？」

ジャンヌ「私の故郷……このフランスを蹂躪している彼女を止めなければ!!」

ジョーカー「分かった。一緒に竜の魔女を倒そう!!」

ジャンヌ「ええ!!」

こうして蓮たちに新たな仲間が増えたのだった。